

日本史概説Ⅱ（教職）

科目ナンバリング ESS-102
選択 2単位

高橋 裕史

1. 授業の概要（ねらい）

国際語Lingua francaである英語の知識と運用能力の必要性が声高に主張されて久しく、また実際に高度な英語力を駆使して各界で活躍する日本人も大勢いる。その一方で、日本の文化や歴史に関する知識不足のせいで、欧米人から日本の事を尋ねられても満足に返答できず恥ずかしい思いをしたと述回する、「英語の良く出来る」日本人も少なくない。我が国の基本的な歴史の流れを知り理解することは、決して「右寄り」な考えでも姿勢でもなく、歴史認識の重要性が問われている今だからこそ、日本の歴史を知ることは極めて現実的な課題でもある。また教職志望の諸君にとって日本史の概略や概要を知ることは必須の知識かつ素養となる。そこで本講義では、上述した問題意識に立脚して、原始時代～近現代に至る長大な日本と日本人の「歩み」や「試行錯誤」の歴史を、政治・文化・外交・社会その他、様々な切り口から取り上げ、日本の歴史の論点を考えて行くことにする。ただし本講義は日本史の諸項目を「暗記する」ことではなく、歴史学の方法論に基づいた「歴史的な思考力を育てる」ことを主要な目的の一つに設定している。従って「暗記すれば何とかなる」という姿勢での受講は、大きな誤算となることを明記しておく。限られた回数の中で、取り上げられる論点は多くはないが、それでも本講義全体を通して、日本の歴史の主要な流れについて、大学卒の肩書を有することになる皆さんにとって、それに相応しい知識を提供することが出来るものと考えている。

2. 授業の到達目標

- 歴史学習の方法と在り方を「暗記する歴史」から「考え・発見する歴史」へと成長・発展させることができる。
- 教育実習で求められる最低限の日本史の知識を習得し、模擬授業を実施出来るようにすること。
- 日本史を通して過去の時代に生きていた人々の社会や文化などを追体験し、説明することができる。
- 日本史の多様な時代と領域の中から「生涯教養」として学び続けられるようなテーマを「発見」できる。

3. 成績評価の方法および基準

まず評価の方法であるが、この講義では成績評価を冷静かつ厳格に実施するつもりである。また受講諸君の多様な多面的な能力を、筆記による定期試験だけで測ることはできないので、レポートやアクションペーパーなども取り入れて多面的に評価をしたいものと考えている（因みに前年度の本講義の単位「非認定」率は30%ほどである）。具体的には、

- ・ 論述式定期試験のみの場合：90～100%（+講義時の態度や積極的質問10%）
- ・ 論述式定期試験+アクションペーパーの場合：前者80%+後者20%（+講義時の態度や積極的質問10%）
- ・ 論述式定期試験+レポート課題の場合：前者70～80%+後者20～30%（+講義時の態度や積極的質問10%）
- ・ レポートのみの場合：90～100%（+講義時の態度や積極的質問10%）

上記4種類の方法で成績評価を行う考えである。なおインターネットでの「コピペ」を防ぐために、レポートの海大は高橋が配布した文献の内容読解を中心としたものとなる。またレポート課題の論文は日本語だけではなく英語の論文も考えている（指定した期日を過ぎたレポート提出は受け付けない）。講義日の開始時に回収する。従って、友達に依頼された分の回収は受け付けない。

*なお正当な理由で受験できなかった人は、一週間以内に教務課に届け出る（証明書等の提示が必要）。

次に評価の基準については、筆記による定期試験・レポート共に①問題の趣旨を正確に把握できているか、②過不足なく記述されているか、③史実関係を正確に把握・理解出来ているか、④事実と意見を明確に書き分け、意見の根拠となる理由を明示しているか、⑤筋の通った論理的な日本語で記述されているか、を要点とする。なおフィードバックは、リアクションペーパー実施後1～2週間後をめどに教場内での解説、或はLMS上で実施予定である。

4. 教科書・参考文献

教科書

詳説日本史図録編集委員会 『詳説日本史図録 第8版』 山川出版社

参考文献

五味文彦・島海靖 『新もういちど読む山川日本史』

・ 取り上げる論点とテーマが広範囲に及ぶので、その関係の書籍も上記参考書とは別に、該当テーマの講義内で必要に応じて紹介する。 山川出版社

5. 準備学修の内容

この項目では「学習」ではなく「学修」という語がつかわれていることに注意して欲しい。「学習」とは簡単に言うとなら教室で椅子に座って教員の話聞き板書された内容をノートに写す、つまり「受け身」の学び方を指す。一方の「学修」の場合、一定の課程にしたがって知識や技術を学んで修得することを意味し、そこには「身に付ける」という「能動的」で「積極的」な姿勢が存在する。このことを踏まえると、本講義の受講希望者は、準備学修として、まず歴史が好きな諸君は、なぜ自分は歴史に魅かれているのか、自分は歴史の講義を通して何を学び習得したいのかということ、反対に歴史が苦手な諸君は、なぜ自分は歴史が苦手なのか、これまで自分は歴史の授業をどのような姿勢で受けて来たのか、ということ等を第一に考えてノートなどに記して貰いたい。次に世界史・日本史といった教科分野にとらわれず、メディアで取り上げられる報道の中に歴史的な問題が関わっているものがあるか否かについて注意を払い、新聞記事の場合にはそれを切り抜いて保存して欲しい。その上で講談社現代新書・岩波新書・中公新書・文春新書の中から時代・分野を問わずに歴史関係の本を1冊、時間をかけて読み、歴史を学ぶ事の意義・歴史的な考え方を自分なりに学んで欲しい。

6. その他履修上の注意事項

*なお、このシラバスの記載内容とは、多少異なる形やテーマで、実際の講義が進む可能性もあることを、了解されたい。またアトランダムに講義時間を使って「小試験」を実施することも予定している。

・本講義は日本史ではあるが、日本の歴史は日本単独で形成されたものではない。従って日本史以外の歴史に関する知識と学習も本講義受講の前提条件となる。受講希望の諸君には西洋史、東洋史に関する上記の「5.」で挙げた新書類の中から何冊かを選び、要点となる箇所をマークしながら読んで欲しい。また歴史学は様々な分野の研究領域・成果に関わっているため、政治学・経済学・法学・語学などに関する知識も他の講義を通じて同時に学ぶことを勧める。

・講義中に必ず守ってもらうべき「規範事項」は、次の諸点である。

①「おしゃべり」「電話」「メール」は厳禁とする。スマホ、携帯はマナーモードにして貰う。

②受講態度＝遅刻、私語、内職、講義の途中退室、やる気のない態度や姿勢（イヤホンやヘッドホンを着用し、椅子にだらしなく腰掛けるなどその他）の悪い学生、真面目に講義を受けようとしている学生の気力に水を差すような言動をする学生については厳しく対処する。

③抜き打ちでの出席調査、小試験を実施する際に、授業を抜け出した友達に、スマホ・携帯・LINEを使って連絡をすることは認められない。

・その他、受講諸君に心得ていて欲しいことを記すと、

①受講学生である諸君一人一人の態度や姿勢が、帝京大学の「今と将来」の社会的「評価」を、延いては諸君自身の能力・人間性・社会性そのものを決定する、ということを肝に銘じてほしい。

②少なくともこの講義では、分からない部分が多くても、将来の自分への自己投資と思って我慢強く講義に望むことを自分に言い聞かせること。

③学の授業は高校の授業の延長では無いので、その積みりのレベルと内容の講義をするので、心得ていて貰いたい。

7. 授業内容

- 【第1回】 ガイダンス(講義内容の説明、守るべき規範事項の説明、講義の進め方その他)+授業「なぜ日本史を、そして歴史を学ぶのか」
- 【第2回】 イエズス会の日本布教の要点:イエズス会の創設、イエズス会の組織、日本布教への志向、日本での布教戦略、イエズス会の軍事活動と経済活動、フランシスコ会との対立抗争などを学ぶ。
- 【第3回】 江戸幕府の成立:豊臣秀吉の死去と徳川家康の台頭、関ヶ原の合戦と江戸幕府の創設などを学ぶ。
- 【第4回】 幕藩制国家とは何か:江戸幕府の支配の仕組み、幕藩制社会の基礎構造などを学ぶ。
- 【第5回】 江戸幕府初期の外交政策:秀吉外交と家康外交の特色、キリスト教禁令の発布、朱印船貿易、島原の乱、鎖国へのプロセスと「四つの口」、鎖国を学ぶ上での注意事項などを学ぶ。
- 【第6回】 武断政治から文治政治へ:武断政治の限界、文治政治の諸政策など幕府政治の進展と施策の変化を学ぶ。
- 【第7回】 政治改革と一揆・打ちこわしの時代:享保の改革と田沼時代、寛政の改革と大御所時代など、江戸時代の転換点を学ぶ。
- 【第8回】 安土桃山時代と江戸時代の文化:織豊政権期と寛永文化、元禄・天明期の文化について学問、建築、絵画、工芸などを中心に学ぶ。
- 【第9回】 江戸時代の経済:三都の発展、農林水産業、漁業、手工業、鉱山開発、商業、商業の発展などを学ぶ。なおこの授業はLMSでのオンライン授業となります。
- 【第10回】 列強諸国の出沒:欧米列強諸国の対外進出の背景(ヨーロッパおよびアメリカにおける歴史の変動)、幕府の対応とその限界、転封の改革とその結果などを学ぶ。
- 【第11回】 幕末と開国:幕末の国内の動き、安政の五カ国条約＝不平等条約の締結、開国後の貿易と社会・経済の混乱などを学ぶ。
- 【第12回】 幕末の動乱と倒幕運動:尊王論・攘夷論・尊王攘夷の誕生とその違い、桜田門外および坂下門外の変と幕府の弱体化、公武合体運動、四国艦隊下関砲撃事件などを学ぶ。
- 【第13回】 明治政府の誕生:大政奉還、五箇条の御誓文、明治新政府の仕組み、明治新政府による諸制度の改革などを学ぶ。
- 【第14回】 明治政府と外交:岩倉使節団、日本と清国との関係(日清修好条規の締結)、台湾出兵、琉球問題、江華島事件、日露間の国境画定問題、不平等条約の改正などを学ぶ。
- 【第15回】 まとめ:「暗記する歴史」から「考える歴史」への思考方法の転換は、なぜ重要で必要なのかについて学ぶ。試験(定期試験期間での実施もあり得る)。